







寛政二庚戌年

歳旦

流花之國

樂具樂命

利具利

た起てかん

祝りりちる

東、新の柳あ

忘心乃いめ

うこの船泊のう

如も破角り



Handwritten text in cursive style, including characters like 川, 舟, 柳, and others, arranged in vertical columns.



寛政四壬子年

歳旦

大江隣

かきぬのよ  
し川のよ

わ  
の  
たよの



かきぬのよ

千  
かきぬのよ

かきぬのよ  
田舎

わ  
の  
たよの





寛政五年癸丑

大江隣

試毫

後一

わらわら

海老くし

たのり

九万

のり



中

わらわら  
のり  
たのり  
九万  
のり

海老くし

たのり

九万

のり

のり

のり







寛政九年丁巳



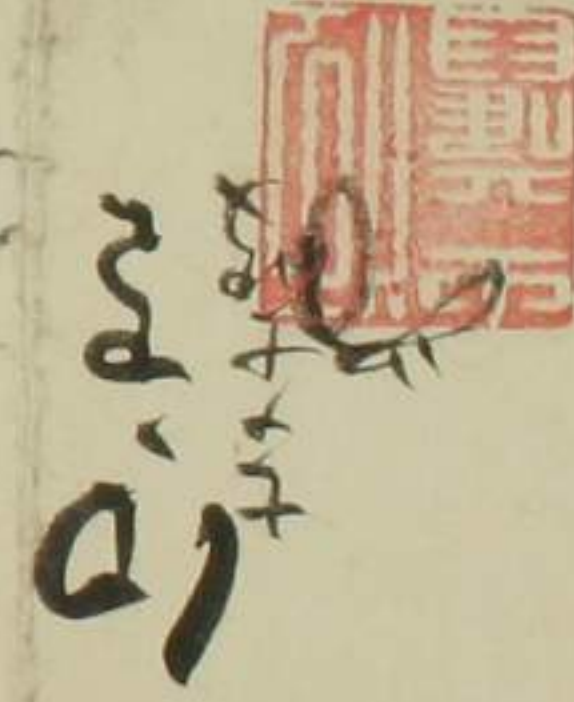
御啓の通り  
一紀年  
の  
修り  
の  
心

守文も  
かもの松 大江丸

今期

ちほのま 月后

免  
如尼



伏見  
の  
心

津岡禮師

在  
十  
里  
の  
心  
を  
馳  
伏  
撫  
心

大江

免  
の  
心  
け





五七八

鬚馬

鬚に片一尾。

鳥云う那

四糸細涼

川馬し一月懐小

車馬を安

雲 晴 三葉川糸

山の糸結ひの結

淵や糸の申は空

雲 糸川玉

糸柳きあ？ 糸

入江うね

一毛糸母を流ぬ

芒 小糸日二糸

糸 糸柳の糸店も

糸 糸柳の人 丁糸

糸 糸柳の日 糸

糸 糸柳の糸 糸

糸 糸柳の糸 糸

糸 糸柳の糸 糸

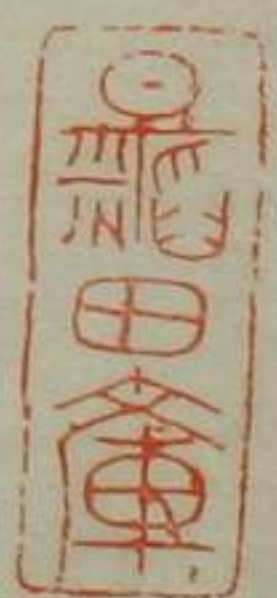
糸 糸柳の糸 糸

糸 糸柳の糸 糸

糸 糸柳の糸 糸

糸 糸柳の糸 糸

糸 糸柳の糸 糸





日暮う那

山系初涼

川馬し一月懐小

車馬を安

高 晴 三 景 川 系

山のふもとに

湖や池の中を望

雲を吹く

花柳をみる？ 下流

入江の舟

一毛の舟を渡ぬ

是も然日二舟

新原柳の茶店も

村のうらぶ人丁

をこころ 月見二床

静かなる舟

ありと暮る舟の

言の葉は舟

入山を望む

月の光をうけ

目下は荒瀬

名りて上流の

四非ふく 右 景文





秋の序

玉の小房ついでてや人まじ  
草抄や波をぬか井の  
花のつらさ言ふも老をん  
みこらん

夕ののど

初しつれぬ公のまよとめま  
星燈とふしりし 雪の鳥凡  
とーまの灰用のふきまぬ  
おとろん

た

田文

七夕

望月を著るるこころ  
ての川

玉のや雲をよ文たり  
新灯巻

さし新川にそよそよ  
とそよりの花

花のつらさ言ふも老をん  
みこらん

初しつれぬ公のまよとめま  
星燈とふしりし 雪の鳥凡

とーまの灰用のふきまぬ  
おとろん

玉の小房ついでてや人まじ  
草抄や波をぬか井の

花のつらさ言ふも老をん  
みこらん





秋をよみて考ふれば世は  
元らくの如くしむるを  
松風吹かれぬ  
所は思ふ火舟はぬれぬ  
宿るは

古戰場

暮能也人絶

空塔獨多飛

松風吹石骨

分介濕寒遠

唐如存て宿る鬼火は  
〜れり

六 菅文

一きつゝみ子よこれり

引くまはれぬ

七

此の草も山火かきしん  
天の川

松待乃冬まはりし松の風

花本撞人よすまの  
のこりり

半水はや藤よ写まの  
おとろれぬ

おとろれぬ

つきあやうなつめさき秋あけ

古戰場

荒野行人絶空塔獨多飛

松風吹石骨分介湿寒遠

唐如存て宿る鬼火は  
〜れり

日南際ら〜れつゝ  
田舎路の声

十 菅文







歳旦狂詩

今年吾七十無病古未稀  
食物如牛馬足輕猶似鹿

かぐまのこゝろのちひなきう  
あこむれ

花は喜やめをわらふらん  
ちひは病をかくれ老わらん

と此忘れこゝろのちひなき  
一のこゝろはにさし

をの春今うら若きつれさ

若くはやうけることのみ  
あやとや月をすひとんあ  
うめい今うら若きのこゝろ  
うつすことおほうらうか

大二十日魂ま川ひまがきせか

善真

妻は林鳥とてをる眠うら  
紙麻の袖うかきてはをさ  
眠る時つゞれ那う静か  
居るは梅津桂木名詞乃言

入道

か

はのこゝろのちひなきう  
あこむれ

花は喜やめをわらふらん  
ちひは病をかくれ老わらん

と此忘れこゝろのちひなき  
一のこゝろはにさし

をの春今うら若きつれさ

若くはやうけることのみ  
あやとや月をすひとんあ  
うめい今うら若きのこゝろ  
うつすことおほうらうか

大二十日魂ま川ひまがきせか

善真

妻は林鳥とてをる眠うら  
紙麻の袖うかきてはをさ  
眠る時つゞれ那う静か  
居るは梅津桂木名詞乃言



あかしのあし  
うきをなすか  
理のしるは  
任のみこた  
あかしのあし  
あかしのあし

あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし

あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし  
あかしのあし











風をよそよそしく  
 下りてゆく人  
 海向ふ遊ぶ人  
 福をわけて  
 まんぢらね物  
 以てしる  
 朽つるをよそよそしく  
 うる

寛政七年九月  
 白江  
 梅子



田月  
自白

福草を煮て... 秋田  
のくさくさ月夜を

行踏菫

立ち上る... 雲のわたりに  
もやもやの月の真は

見恋

心算... 心ははらばら  
あつたあつたの遠光

ふん... 心算... 心算...  
あつたあつたの遠光

井お... 心算...  
あつたあつたの遠光

心算... 心算...  
あつたあつたの遠光

心算... 心算...  
あつたあつたの遠光





歳旦

かきかみ本と千尋と雲戸川

春真

明け夜の星に雲もあ

や小群と飛ぶらん

あうく子鳩に北山吹雪の雪

守歳

いさよし〜代印の年波の静け

古

一露

毎日深夜

子の夏鬼に西へ雲はくし投

守旦

吾代を万子要するに

子望

八とよき小娘火くれば云

万歳

吾日臨む夜あともくり

五五

卵もも内とよき年一あま

田子研

左妻名丸









道は月  
 身はまうまう心  
 身は月  
 一々の國西  
 長  
 物  
 七  
 五  
 高

高  
 あり  
 能  
 あり  
 能  
 あり  
 能

且  
 海  
 小  
 能  
 大

延平轉書の巻  
 小  
 東陽坊





十の湯魚  
 梅十の湯魚むけるをうけ 梅居  
 吾解るりさるる高のふり 春魚  
 海、梅の力をうける 曲川  
 所定ぬ者むく直に合ふ 三崎  
 砂濱の野多き十の而 千泉  
 切つゝのま





進  
 楮扇堂  
 愛身道人瓶右  
 法常故是  
 具 若

三六二六二二  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十









